

あらゆる基礎 しっかりと



昭和大学医学部乳腺外科准教授
明石 定子さん (53)
 =1984年卒



姫路西高校

兵庫県姫路市

地元企業と連携 国際貢献も

姫路西高では、地元企業や姫路市と連携し、教室内だけでなくどまらぬ課題研究に取り組んでいる。
 姫路西高校卒業生でもある大村禎史氏が社長を務めるベビー・子ども用品の西松屋チェーン(本社・姫路市)が支援する課題研究もその一つ。2017年には生徒が「知育玩具」開発、18年は「マタニティグッズ」開発を提案した。
 さらに18年度は、幼児用の服

に着目した。子どもの成長は、着られなくなってもきれいな幼児服は多い。そこで全校生徒に呼びかけて幼児服を400着以上集め、フリーマーケットで販売。姫路市文化国際交流財団を通じてカンボジアの子供たちに売り上げを寄付し、

服も贈った。課題研究・解決だけでなく国際貢献にも役立った。



幼児用の服を集めてフリーマーケットで販売した生徒たち
 姫路西高校提供

わたしの母校

■「目の前」全力で

乳がん患者がどんな人生を歩みたいのか。全摘出、部分摘出し、患者が優先したいことは何なのか。「自分は特別なことではない」と謙遜するが、患者に寄り添い、きめ細やかで高い手腕に全国各地から患者が集まる。「自分が一生懸命になることが、誰かのためになる。そんな医師

という職業はありがたい仕事」とやりがいを感じている。

■困難笑い飛ばす

東京大学在学中に男女雇用機会均等法が施行された。外科医の道を志したが、ある医師から「当直室もロッカーもトイレも、女性用はないよ」と言われたこともあった。それでも「困難があっても笑い飛ばせるのが、自分の良いところ」。29歳

あかし・さだこ 1965年、兵庫県姫路市生まれ。東京大学医学部卒業後、東大付属病院第三外科に入局。92年から国立がん研究センター中央病院外科で手術の経験を積み、2010年に乳腺科・腫瘍内科病棟医長。11年から昭和大学病院乳腺外科准教授。日本臨床外科学会編集委員など多数の学会役員を務める。

これまで手術を教えてくれた先輩たちに感謝を

約3000件もの乳がん患者の手術をしてきた昭和大学医学部乳腺外科准教授の明石定子さん(53)。兵庫県立姫路西高校時代は「何事も全力。それが今に通じているかな」。患者に向き合い、選択肢を示しながら患者自身が納得できる手術・治療を心がけている。乳がん研究にも取り組み、後輩研究者の道も作っている。

【前本麻有】



火
ふるさと

水
カルチャー

木
ちよい旅

金
見・聞・楽

土
学ぶ・育つ・挑む

を掲げて生徒会長に当選。当時の夏服は「ごわごわしたプラスチック。ポケットは手帳すら入らない小ささという具合で、機能性も悪かった」。制服改革は在校中になかなかなかったが、副会長が提案した「高校生でもできる社会貢献」として献血活動に励んだ。文化祭の学年劇ではプロデューサーとして全体をまとめ上げ、リーダーシップを発揮した。

で結婚し、37歳で男児の双子を出産。当時の職場には医師が3人しかおらず、すぐに復帰した。育児も仕事もめまぐるしくしたが「忙しいほうが好き。時間貧乏」と、また笑い飛ばした。

乳腺外科一筋に25年。乳がん患者は増加し続け、現在は女性1万人に1人が患者になる可能性がある(国立がん研究センター)。乳腺外科医の必要性を強く感じている。

「今、将来になりたいものがなくていい。人生において無駄なことはないし、いつ何が役立つかわからない。高校生のうちにあらゆる基礎をしっかり身につけて」とエールを送る。

母校の後輩たちには「今、将来になりたいものがなくていい。人生において無駄なことはないし、いつ何が役立つかわからない。高校生のうちにあらゆる基礎をしっかり身につけて」とエールを送る。